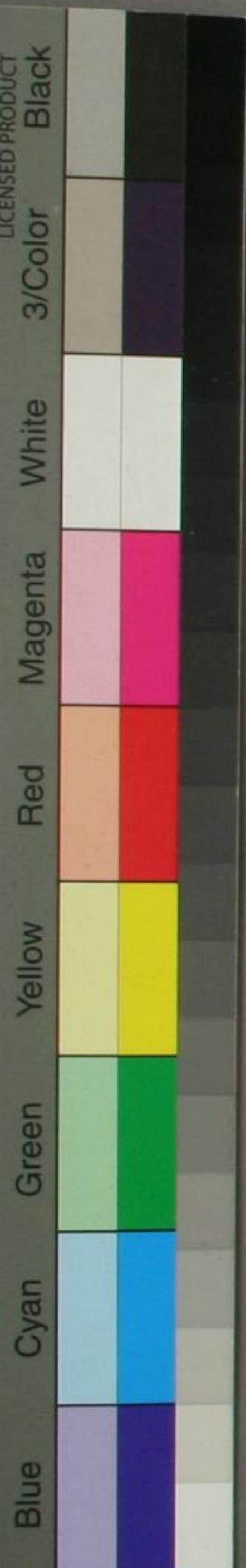
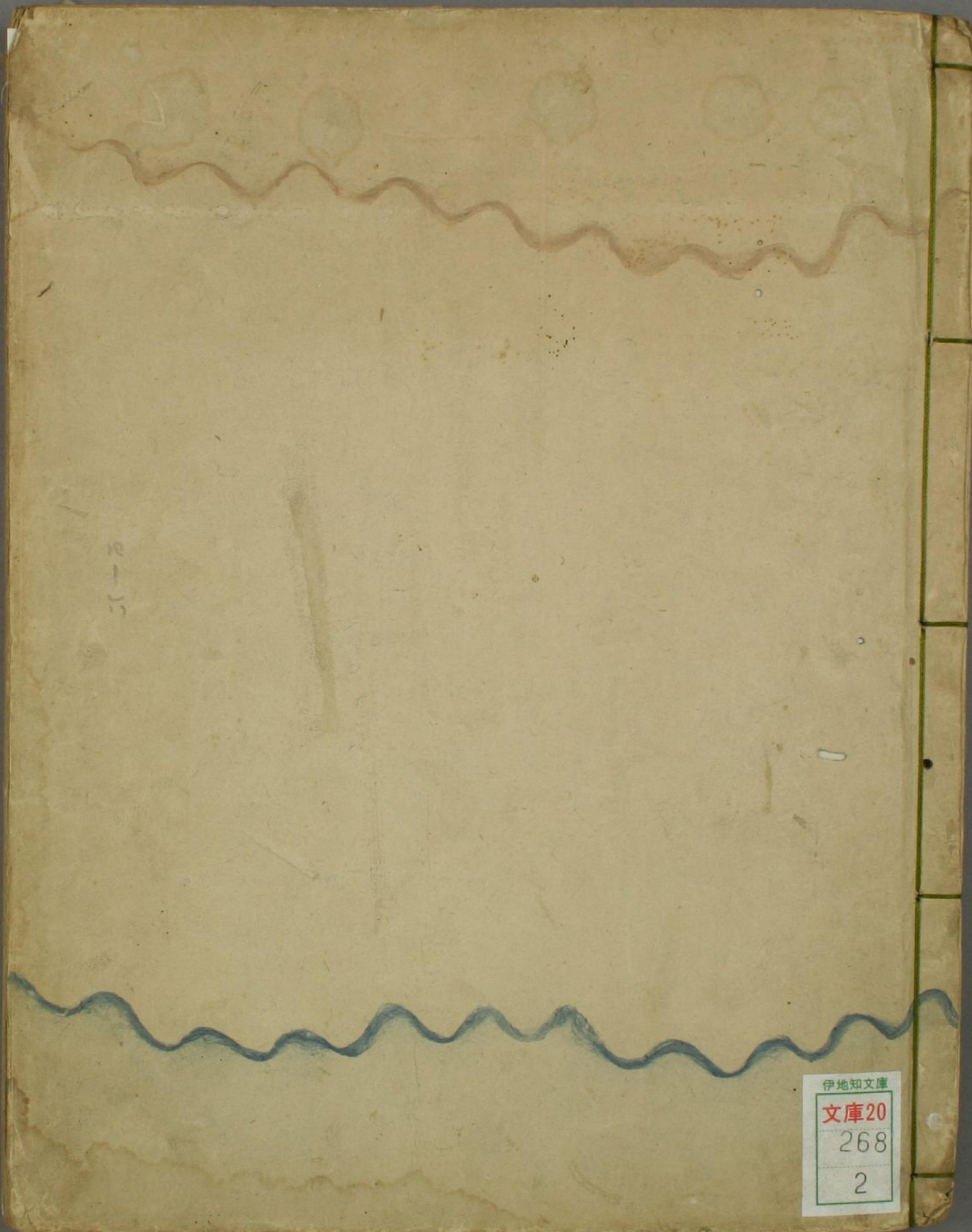


1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23

伊地知文庫
文庫20
268
2



草庵和歌集卷、第四

秋詩

伊地知氏書冊

聖護院二承法親王家平首哥小早秋
竹葉の下やうもあら吹づく月の月夜小林

入道亦太政大臣家三首初秋羽衣

あけよよ羽衣の原とすもあら竹やうもて林

獨吟百首

さくそくもや吹きうちけんたるの竹つむぎを

彈正平家三首哥合下、初秋風

ひめのめりせあらす風がりこかづく林

二階入道大納言家一百平首小初秋

玄日のせうちとすの木しらむのあきとすのあわせ

清五右大納言家三首丁内切

せきよのひの處よけりから秋やかひの名がるす

臣ノ御家七々古首小朝初秋

秋葉の風の空寂れ音をとすあはれと深き

國家百首丁

臣ノ御家七々古首小朝初秋

兵庫院長秀家七々野露

ゆうすいりをひづらひ。白鳥のむかこのわきねり

清五左大納言家四季百首丁

秋じよの風にあらあつてふと秋また秋す

國家七々古首丁移暑

西もよもわゆの風ともすとくは

花山院大納言家三首丁亥露

そめの初のとばぢめいそくのむせや

寺稻院贈左大官家七首小七々雲

ひまよぞとくとくは浮雲に絶ちゆれり

七々稿

よひよあひよひよひよひよひよひよ

七月

あけのつ日入るしの月もやあたまをやすの

左大臣家七首丁同前

わうすのちんぢんの月もやすのすよの早あ

贈左大臣家三首小河

わの川倒錯よひて中あうやこう

重義院詩百首アシキイニノヒガツ

片づりあれば河せんとしめじ水カタヅリアベラバコセントシメジミズ

古鳥

古風の風すすみあじ早のゆきの用の戸あけは
河の川をうぬぬうま牛せきほねうさぎの風

七夕後朝

秋とのよの川水にかうり前人のやがさん

臣口の豪百首シロノハシヒガツ

あき晴てよわせにあか天の川の月夜に

花院入道大納言ハナニイノザシ

秋はるさく日よりたむはるえあがめあはれ

君あり

あはれにさのれつしがれにてとすがはうらの萬

和歌兩月次三首曉

わきらのと恋葉ちるすくもあひるの紫

獨吟百首ソクインヒガツ

またあるあはれ秋のあひるやひきがれの秋

序の左大納言シヨウノサザシ

はのけとじくかゆきの秋あはれうちれ秋

同家向十首ドウカミタシ

半世かうともせせよすのうて秋

獨吟百首ソクインヒガツ

とわりと思ひてよそひにかほひのあはれ

夜の月の下のやうなまほしすらよめま
ゆう里のよみの森に音とくとうとくすむれ
森の声をかねてあるゆふすらやれづきの

右大臣家七首か夜秋風

下葉を吹きむすびむじれのすすみす葉

秋風

さくらの神かじとせの風にまわるあゆ

夜秋

葉すすみ風をきす葉のまつりむけむれ

海と秋風

葉の葉をきくねむはり葉りよ浦のあそび

野秋風

ちりじりむとくろまく葉の葉の葉

浦の方大泊云家月次二首早秋風

鹿のひの枝りつかへせくすくわさ因りせくせく秋

小鷹狩

はくねるのあめりくじゆくよも葉

浦の方大泊云家三首か野か森

小林原元をかずんじたのふにむかひて野

季長ゆかし森

がりのよけのものにかのうれうしき森

其住やれんじやくは秋比添をすてあらす
のを走りてまわりぬるやうに物の秋の氣

二藤入道大納言歌十首

小夜花

病とくさんとくとかかづりとあはれ病とく
人の手首うとうけ病とくゆゑ病
今よかのののねね病とくおとゆゑ病の花
ゆす方大納言歌の首

ゆまくわせとくらうすすみ秋とくわせの病とく

前とく家とく月次三首

小夜花

勝如木て哥とうすけ木とく月とく
わきのむけれてこんたつとくもやがとくまつ

彈正平新と象と首と合せ善光

西露

ほき木てあたうてまし悪井とくひとく

月の露

前雨日風とて秋桂

花

ゆする秋日とて秋桂とくあらわにとくさくとくのを

獨吟百首

あいづるま山うれむ地とく日はうわづきのま
毒中ま花と

はづくひれむあざきとくも高めくしわのま
ひよ大御云あかて高

えれどれもくわくわ花とくまとく秋の花

の秋を高めくすむとくわすとくわきとく
秋の花

佛事とく春の花とく野住病

源大河家家翁哥倉子秋夕
ゆふにわやうるくわの翁翁の秋夕
宿憲は野哥倉が野耶秋翁
あそびとよしとよしとて自喜めのや承をき
前角に敵ゆゑ到着
わむわはねりかんせく病をもれり
野翁の
号左ノ御歌を句十首アリ前 あつて
世間へとすとぞうりを引くわねりかんせく病
義父生
しまの右ノ風の空にたゞ暮らるむもつまく也
國ア御歌十首アリタヒ
アのこなと麻でひことせんかト
寺の院贈左右吉あふる虫
さりじの扇にえそくねりくすうちれりかのま
秋のるても思ひてのひのひのひのねじ
不動院寺かて車出
また原をもあがきあかせ根ひがくつこの松出
風也出
根もとよもよもよもよもよもよもよもよもよも
風也獨家、月夜歌ナニテ小屋、風也
ナリのすのあやかしのあらわしもあらわし根もとよもよも

毒
鹿

すらはまじゆるにむかひてありを向むまことか
二鹿入道大死云を三首アリ其の歌

山鹿の死体のふくやとせきやまと日づけ鹿の

新白吉船三首アリノト鹿

タヒト入ねり松としにねづれりおとせ

友原喜経はうせぬ一の首アリ田波又鹿

烽田れりその新されりりやあひとニ鹿

入道吉井鴻猪家三集み首田波鹿

わすのと風よもよしとひくとひくとひくの多

野鹿を

わきひのりやをゆめ 痛たとくぬすが志

雪護院はみすとぞ鹿

恋おの鹿あけよ秋の夜ふくやあはなふく

有
名

ねうまえ鹿あくすのをくぶつまやはなふ

山鹿

そちこかれたあこむるわくとくあくまくす鹿や

庚文また花

相鹿

型をいぢやみけのねと鹿よれしめうて鹿やん
かのきの山鹿か鹿のゆのうれいづのゆのゆの

聖護院入道郭を歌三首月前鹿

あらんちもあ やの志の月と月よりやうる聲也

庚聲竹方

歌まうてはくの月をすいひあるへと余れまわせ
不あえすゆふて慶庚と

詠かんすり秋風をよしりのうち庚の意をつるるの聲
大膳太支頼康佐木せせらあゆて奇く手也

丁野 庚

栗葉に歌て酒を唱へくわねうらうきしもは志
金華寺の前へ

秋あく葉代をかくゆそく はくの志だむかは
彈正平親とあひそぞ

野 庚

いあすのあさりう音はまへてはれの鳥はす すら
音ひた大御云ひ三首へ

笑ひつねにせがるへつむかひせがるやうす
ほおはせ

こひ里見とひの都も庚の音も机うらう聲をうわ
は下慶達うませゆ えうすまむも

春のあくめくやもく うの歌もすくせん
元ひに月また車からすと酒をまよ山庵をか
かうゆえ えうめく し

はなきの音とすくとすくと歌ふうれ

又野

也見ゆるをもちうかむれあら祐はひ一村の

御の方大國を處すそや月の初夜

也のとしののねんておうの向の秋暮

重羅院はる草子。因と名

もよくまき花とひらて葉のひがみのもうるは

馬御前あ、月と度十五をか田家秋風

ははなす山風ひめめりもすあむこれと秋色

出すたぬゑぬ句十をみ駿遠

とすとせむこけしき生板ことひうづくらす

獨吟百景ノ

ゆかりるれすもよくわく風の風櫻あつ葉すく

重羅院はる草子。因と名

易一古の神代

もよくわく風れすの私有氣あらじの端内

和方あくとせせはうて寄と手筋が肩

朝きのとくのとくにんじくもれよひの年三の題

洋正軒と家ふそと合言月

月もあらじとて山車と夕の風をともねむ

不動をすかて墨月代

すくわねどくひのとくにんじくもれよひの年三の題

ねみすかて月をすかて月

か山松のすかて月をすかて月

建武二年秋裏の育秋天象

西の日と東の月とをなうりげうきの宵や此處

同和才水月と云ふ事同月

さうこめてかわらすと秋露は立ちあがめ

一應長比千枚百足了

ばく葉はれかの下病の見じ風のあんがる

山月

東はすみて爲くややかに落葉も葉をみて御

猿守行春とせゆ おふゆ月

行院の事はい事。まつりしもと月をの方へ

内の大狼云あはにたる山を覗む

月教うるかかげと鉢庵代や萬葉

西アニ志あ合源山月有

かう先代すじと詠うる事やいがく

津は左の鏡を三そ山月

ひくみうきのかくらほのめぐらほのめぐらほ

津市洋井とよせゆ 二音ア津月

あらわの山の山のむかひと山のむかひ

お前 あらわの山

おとすれのとすれをまつと育ひ

前暮大樹云ゆかて宿月

山あはこうれいひ若水のまづれとよしとお

勤院院障子小築山ねじとお

ひるやじめのとおのとおのとおのとおのとお

光音寺傍に訪ゆる暮おとおとおとおとお

や白毎

うかよもあらわにあがめをせむひて山のさん

透花院内大臣處を明月園名

ゆく雲の秋の葉を散らすと秋のひらきの石川

野宿月

ゆ衣と毛のあらむかねぬまくと秋も

清風大樹云萬葉の月前秋元

二森の木を知りじとあらう月と元の聲

國家九月十三夜十三月の月

秋のゆびくすれざるとも冬の月は月が

乃有音

あるはれの、内りて秋の月の声

草木金石十九首に野か月

秋の葉は秋の聲、そぞく爲の聲とまつてまつて

金鏡を守つて無事か年始　不吉詩

むよむよこの聲、あまくわくありまつてあらわ

復習院内大臣處の月前秋元

風の声の声もまたてあはれの月前秋元

かよの声の声もまたてあはれの月前秋元

草庵和歌集卷第五

秋聲下

妙法院三郎は親王家十五君より首寄等詩集
有りてよりゆきめれかふよとはくわほのそれす
御子方入道大僧正寺三十首が、月十日
はの事にておもひあらむよといひのけを
金蓮寺にて是はうそと見をあへぬ
をうらる余年の月れわらすの想事もばなうす

河原

えり川やうのうりよひがふくまくすの氣

墨月

ねうる葉の河原からくしきのとくのゆきす

やくは入道大僧正家に唐が、正月、あす

尼うのあはれうりて霧晴く

は岸津井とあせり一す

ひきやをはうと霧れとくにあはれやくわらの

きじゆくとくとくがとゆうく

ねまわうううとれどとくとくの音とくまくの

法師長慶すとくとく持一品を船の首

とすてわよのひめが船せうとくとくの音とくまくの

相撲あはれがたうて月半をあきませし、お

とくとくおまかはすすまじの船をうわとくとく

告本ほよ秀あかく度月

京うち何事かれて來みまくとくとくす

也は院事すとぞもお合寧月

室主のあらうて月のあらうてまよひや達

華月

月の夜やうる月の葉やくわすめにや魏
重護院入道郭にあまく月前葉元
セム高い御とう月の紅れねお花うなすよにゆき
椎木市は郭にあまむば山てすとくわ物津
さきのとれ酒す若のうて月前葉やうのほの松

和寄市三首海月

伊豫の山のあまのさがはうと月の夜や
青松院晴たるゆめく月あ雲

月の夜をそむく煙こうあらゆまくは松

彈正郭にあます首うす

ちはは姫がはきゆく内神のまれせむる御
清涼不為情ゆくわすた大御音うまくは浦
月景か煙じつはりあたるや我方とくとくとくとく

賄左令あまてはあ洞と

月の夜をそむくとまつてあまうてうのゆくわる

江月

江の夜をそむくとまつてあまうて取引

二郎入道大御音あまて海月

青松院晴たるゆめく月の夜うまくは浦

賄左令あまてはあ洞と

月の夜をそむくとまつてあまうてうのゆくわる

海を月

ほまのうきあわゆる秋の夜れりと月や船
御法院ま月すも青す合ひ乃
ヨシナリゆきうちねは月より厚のてあゆみ
物と舟

づれ志の三毛のとくさ
あさのいよほ月

音やかの葉れど金絲竹簫すと月は風

湖を月

はるよれのひりと月をえりあらひに船
古寺月

かく音神を飛びうすせゆ
月れにすと月をまちに相りうすめの月
月を大酒と月を香百をす

ねうの月のゆすと月を雲はまれと月の就け跡
雲霞院二月は就てお年をか行月

さ枝ざりがゆのから竹のよじゆくと月は
戸庭萬葉歌集を用月

東風うつふむと月のすと月をすと
賄度貢あゆれ月を三重を

きよひき代ひしとれりや月をかくすと月を

月影鶴

月影あらうと月をうるまのと月をと月を

續改定春翁詩選

小序

身をもとめしやうから里ゆて故人
贈左官あつて乃翁詒也

身をよとすの原乃へんをかわせ

田家月

我の生れ田うらうらは遠き事と云はば
うすうすそのものあひ教へてあらのまづ月を抱く

獨吟百首ア

秋の風のうらうらの心とすのあはれをさゆの音

医業猶歌七首ア

わざとみづかのぬとすりかけりやまくの御すの月
不都寺庵家かくとまて等と御て野宿

高きうらのうるるるるるるるるるるるるるるるる
元歎きのうらやほほせねのうちむちむちむちむち

医業猶歌和義翁家かく月ア

あえてよきよきとくやくし、いはゆのゆく月は

入道前大政令家三首

小序

さきよりの月高き氣にて入とせんとせんとせん

二葉大酒云小花大酒云すくせうて御はく月

すくせうておそ哥よあき 小海と晴月

金子たち朝す被つて刀をあくせんとせんとせん

西御家首大草十五をうかみ月

軍あくせん被りう京の舟船のつける舟船

御主方八道大酒ミサカ也月前暮クモトとよて
山ヤマの邊ヒザにがよくゆきと月ヅキこきりそらの下シモをあ
長秀ナガヒデあすて晴ハタケ月歌ウニ

鶴

風氣カエダのよしゆきとよしゆきの夜ヨリかとれ宿スルもまわ

彈正報タツメイハとす首曉月

鶴

身カラはるひの月ヅキをかたむくのうきりあつ
贈ゼン左大臣サジンの首ネコノ初ハ暮クモト

河カワ暮クモト

ああああめめめめめめめめめめめめめめめめ
脚カツの裏アヒ大河カワをかく渡ワタ暮クモトと

いざわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわ

河カワ暮クモト

ああああとととととととととととととととととと

浦カマ安ヤマ大河カワを空スカ百ハチそ

ゆてあい秋ハ日氣ヒカエの江カワをさりりこめとおち

國カミ御ミサカ八月半ハチ十五ジ首ヌメ湖カマと秋ハ暮クモト

きりわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわ

人ヒトめんりんミンリンすとすとすとすとすとすとすとすと

桃井モモイ富骨ヒラカ合ハ河カワ暮クモト

すとすとすとすとすとすとすとすとすとすとすと

西ニシ御ミサカ十首ジかわくあく

川カワあアのまマもしやうえ風カキのうのうのうのうのうのうのう

相霧

朝すれぬ風の音りてあせりよ
深夜あそび

ゆのよひやのねむつめうさりとまの音
二陳大納言三元小野鶴

ひりとりて度時山へもひよのをのれ鶴

獨吟百首丁

荒らひよのれの鶴かうほれ唐や雲に鶴

國の遠日そア

月見るをさげやあさつのうらひすれ鶴
二陳八首大納言長あすきのわづてとさりて
多びどうて三合せり や鶴

墨のたれをれすりしる荒れ山へもひよのまし鶴

彈正の三首月前梅衣

冬の節をれいのうすむきのさすの月前度

秋左季の佐和義翁三首梅衣

中後院二首新と來年半首丁
けはれく船風しそす、あやめのれ衣法

彈正年新と來年半首梅衣

月の夜にそぞりてのてかのうのうらひよのまし鶴

月前梅衣

あらすとそぞりて月前もくらひよのまし鶴

人全まきよとよんねく や鶴

宿りれましとおれりめりてくのあひた

秋衣

病めしからへりて、若うきのれあひまつら

擣衣

竹のえやうすすらんまくらりとおすの音がわ

浦の江大酒云西あて被衣

秋衣にじゆうてぬるをかくはねむる

黒被衣

あきと夜がとよ向黒のまつりやまかの音がわ

同罪井字かく被衣

そよふ音と響きあわせ風、風のこよども衣うな

夕被衣

銀縫きのをとよだらけ、深青のうすの音が

山家被衣

山家見とよ葉の音と秋月の音とまくらの音

すまつううかへいとよの秋とえ秋とよの音

二疊大酒云夏月次おと月前被衣

わざり原からかとじのゆうとよわらえ音

同上

正月十日かわらへ

なづしきとよとよわらえ入るかの音とよとよ

拂る衣大酒云十日を

秋もれのむすび衣月とよとよわらえ音

花火燒人道大酒云家ゆき蓬樹被衣

よきうるいをよしとよとよわらえ音とよとよ

二陳入道大師云汝波音海空禪家

かすすじ浦のりをかきしむはりうこく

月あらば

月よみの葉をかきとすくわよたるまゆ

墨榜衣

墨とてろよう度を祐の幕がまくすくにれ
かのうかとせんまをくさりの毒、衣

夜榜衣

をし、うすの幕をほの幕がまくすくにれ
とよにわくはしも幕をやまくすくにれ
ゆゑ大師云あかて萬

前萬山歌ゆてもあ

うゆきえうよ萬れ幕をよねりとよわが

は京津井舟次三首乃か萬

かのうけいの日ひよなじとくのう

前太政大臣おもと萬

きくよれもとくのうのよまやの萬

御子左大師云あかて萬

贈万古家ふそとすく萬

萬翁れうわ幼き老い代やねかのと萬

金玉奇じて秋あ

まくすくの財めりまじ和の歌あゆくわす

秋田

かのう内 その一 そひまき そひまき
大原野 かとけみの けい
あつえねね ちのむを かひすりと こだてほく
臣 仰 お見 がひま
秋 かわ くら そひま
脚 かか

足 しらひ ひづひ ひづひ そひま かひま そひま
西 緯院 すすき かひま
急 かづかき そひま じゆせん そひま そひま
彈 ばん 早 はや そひま そひま
山 さん そひま そひま
山 さん そひま そひま

紅葉 海 ひのま

西 そひま そひま そひま そひま
紅葉 かひま かひま かひま かひま
花 はな 院 いん 通 とお た そひま そひま
あひ うるひ ひづひ ひづひ ひづひ ひづひ

す向 むかは ひむかは ひのま そひま そひま

不都光奇にしてあづけゆ
かむ葉

ひうちれん走乃は筆葉代りしよりねとげきゆる院
林すむに都はぬくに位言體を國をすとれやが葉
はれのゆふりにまつて筆葉すのをいのりとくはな

也

しりりすりつゝの森林ぢうけよと考へすまゆみや

金童寺すみて月前植

春はなに月見つづふもうらひうらぬよもすらゑ植

待はな失綱まむすも育か月前筆葉

そつとひづりれ錦もすわくすちせどすがの紋

並み唐雲をまうりそおづけゆ
か言林月代

おひそり豆ひ後引の日のはぐくとすくとすくわく

讀辛翁集養虎のり解者行書形がままで

首年博セヤ
小原少翁

わくはづくはづくすくはづくのむちおおやまち

獨吟百首ア

七社のものわざりあうやうこむじにまく

草社あらぬけ

もあくとねむ

ひしんくさむとやひおおきやめ

小倅寧相中將歌三首ア

野も山もあらわすとまむの月の聲さうかのうか

暮秋鶴

型のやああとさりて秋鶴の歌のうれす
うれは歌のうれと歌の鶴かすその歌のうれ

前田風かてれ道を衣とひて
あひてまう風に吹むる波をかくは
贈左官三首下洞有五
ゆづりとあどひて舟かきの船一叶

草庵和歌集卷第六

冬詩

御子左大綱云家三首初冬

ほくかう秋をもぎりて山風けさせしを

小野能三首下洞有

村雲いぬのよそせ山風くはすじ付事

二藤大綱云家三首初冬時

久もかくわづけてり袖五首下洞有

时

えりすまくまし袖五首元はさみの袖の家

寺務院膳左官三首

山の山の材をかくはくし

春風

左衛門始和義親らうめく尋てあつまひ。小姓
志士。芦アシみどりとあり。財をひそす。そぞり。鷹
寺。御院賄古。先主。歿。小姓時トキ。
松の。多武の。つる山。の。吹。じり。はよ。し。せ。ね
大膳大夫。永康。あやて。東時ヒタチ。
吉良。桂。いす。すすき。を。す。印。も。か。き。と。の。御
重羅院。一。弓。法。熟。了。表。年。首。朝時ヒタチ。
防。日。れ。け。と。あ。ま。わ。材。も。い。く。ま。と。よ。う。降。御。
御。方。大。御。玄。家。十。首。小。タ。付。あ。ば
や。ま。く。く。し。海。と。す。ま。い。ひ。き。と。付。ゆ。け。く。船。
風。前。晴。雨。

山。風。の。吹。強。う。り。さ。走。よ。く。よ。く。吹。け。よ。し。せ。ぬ
む。御。御。御。お。ま。く。て。仰。付。さ。れ。お。ね。御。御。御。
立。ち。か。れ。え。ね。わ。れ。れ。村。ま。し。物。の。山。の。森。の。
青。椅。院。賄。左。官。あ。や。て。時。ぬ
吹。ま。と。い。く。と。尼。わ。や。と。ス。風。は。く。ひ。財。ぬ
刑。下。蒲。廣。都。督。伏。う。り。て。表。一。ね。小。時。ぬ
わ。も。の。の。向。ま。た。と。伏。う。り。き。と。ま。の。ひ。う。房。
西。御。象。か。く。刀。せ。び
御。育。か。く。の。ま。れ。材。も。い。を。ス。そ。う。け。の。ま。れ。材。
金。堂。寺。か。く。膳。付。ぬ
か。と。せ。ぬ。び
う。れ。わ。く。も。ひ。し。と。と。向。う。の。房。と。向。う。の。房。
名。表。か。く。の。被。ふ。ゆ。と。と。向。う。の。房。と。向。う。の。房。

海老味

うひてゆきのひのひすゑをよしむし

佐吉祐百番手合の落葉

市音の本葉が晴れ

獨吟百首ア

名代のうじと志紅葉の青色に

贈左大吉あゆて落葉

あゆみすすむ葉がりくさむの

金童寺十三寺合

鳥たまづれども山風のせすまの葉

彈正郎の落葉百首ア

ひなづりともやうてタクセのよしむし

鴻音葉

そよふれの花びらはるかに葉がくわゆ

落葉

源光政のうきておそれゆか落葉

落葉

うよどく石井の西の西ひの木葉のからゆ

大井のひの木葉のへづれせせのあらゆ

西ノ井の三首ア

いはなされひあとせれども葉はれぬ

重慶院の育河落葉

仁葉のゆきはすすめりせむとし

爲葉

ひまく風がむらに葉はてむかひよし

は原津守ゆくかて爲葉翁

けきねそえ葉の花がむかひの爲葉翁

國御百首モア

前用日あつてあよ子柳小庭爲葉

高のちりやゆきはとよ草や内せたひの花

勸善院傳子がやと川をれぞる前

りの川下氣のこゆきわやしと川をもせ

爲葉

祁門はひくらやばくのをうりてすみ葉翁

青松院勝石官家三首強翁

西の花はわの花のあむかきの葉の花

國御百首メモサ

又言はうきや秋の葉あれこのこと葉翁

冬年モア

今また秋乃へ君の西みへまりの葉の花が

ゆきのうの花はと瑞いぬくらうそもとわくと

ひの木大樹云あかて野宿翁

まくわくやと葉の花あじつかひだれかの

金玉五十元合實

杉の弓矢野もあくらむとおのと松の花

枯葉草

りうれすも葉や茎が無くなるやうなて枯葉
人木白いの花と十色あ連れて玉露茶
まふの花とそろそろ花といつたれいじゆ
左筆の佐和義翁は少し野菜を
詠ひてはいとおえのこよこの野の草

冬月

見るのも葉してのうけがわくはるに候
まの月の家がおぼてては風の鳥の音が聞
はる津井月次二十六月

御おとし大河東十そか河冬月

綱代

風の風と川の水の音をすやすえりあは
金き寺賀合子
うねる波よめや綱代の月あらわし
小舟のりあらへるを傳せんや十そか河と冬月
東北の風とおはなすや船の波もよこはめ

冬

むとあるの音をさする天寒ひすふうの音

彈正平根てあまく首子

まくらの音をさする天寒ひすふうの音

西ノ舟かすとおか河

もとせりすこしはのそよかく

瀬水歌

思ひを寄るすまほれもしこうりそ源の音よき
龜乃島の山の巣巣をねむるにあらそえの鶴の

沙

えき河よりまよひあらせいかや、みのたの跡

金葉さくら池か

あすくわくすく内のかのゆやまは池か

鷺左右吉あはるは水

あわく深れれ音しきぬのくわくとくすくとく

初水

三つわがまこと浦の水のむかひに

里吉詩三首合子湖少

うちみだれに橋の先の松うちゆかの浦

沖す右大酒云波三そくすく水

乃まともにれもあらむむかくとくふくとく

梶井一京詩集三首が池水

あらけの蓮あらかじめの風あらかじめの

小余室相中物あらかじめの二首が水

わざわせのいはつやと庭の山川のゆらぎとてわざ

雪護院入道歌と東かく月をか

池水

つまみたるのよのうゆ
くら涙がたりおれ

師古房大酒云句十首

鶴子はのひにとかくねびていふのゆゑ

夜水も

そそぎたまひておもやまくよめくまくわ
久らげたまわせくわのせゆのとふよ

贈唐寅三首

なれどよかうてわからぬを飛
二東大酒也

一百首かに水も

わづかじきのれりれりれりれりれりれり
金蓮寺等合水も

かみれどもほりおひくおひくおひくおひく
かみふり

お川の風わらうもくちうそくけをかのあは
小唐大酒也

か河あや

河あやくこあはよむよむよむよむよむよ

師古房大酒云家十首水も

遊波もやなひのくせよくあるゆくゆる
れれれれひゆく水もゆくゆくゆくゆくゆく
テセキ

れりあせつれしよくすくよくよくよくよく
くよくよくよくよくよくよくよくよくよく

家十首水もよくよく

よくよく

海を干す

松吹く 日既にしづかくや風の吹きゆめり

食事寺子食す

風吹けいそしむまゆの涼風すすむあくら

席す左大納言坐すわする

あわのう室にあまの御前す

大膳大夫康就三そす

すぬの浦やすらぎすらまくら

鴻する

りくらひく鳴きよのねりくらはる

穢口る

不居くとせの原にゆかのうてす

延文三年重陽院へ道耕す時すと浦の水

和音浦にさひのむと今もちやむらめく

二京詔と家ゆす首す

わく浦へみどりすはよむらをくはまとう浦

延文二年因裏の首ゆ先動也

はく浦へみどりすはよむらをくはまとう浦

傳子歌集美語へり大江鷹谷許ゆす

よみゆ

和音浦へ入はゆづくひのくの歌浦

青空院へ道耕す時すと浦の水

大江鷹谷許ゆす

は眼盡るすとゆすと浦の水

あはうれかといひてゐるが、お見ゆる

太郎富のうちへあづけ

さく吹きの風より

金華寺の古藤叢

音じやくとくわづかに

竹叢

表ひけらけの黒の竹のあられ音ふる音の響き

五叢何

前赤大根の古藤叢

朝すすむひよる露水かよむかよむは叢か

風アのま一日百度か古藤叢

老手アリか

香いたすりやく風あすみでさくの風と蛇

神音附めりとうりとく山やひのゆうひのゆう

金華寺二年合初雪

毛ア風も山もくわづかのうきの御高が

雨ア御高みえ山雪

と相なれいの葉をつらぬけやのう

八道前太政大臣家三首初雪

かねまつわのあけのまことにさく山のこづかは

は序解井、ゆくよかとすけの山雪

山のこづかは

不思議の事す
うれし事す

かの本をもれまじめにねりはげの事す

贈左大臣の首勝

かの事すあらんやとひ山の事すやとひ山の事す

序文左大臣の事すあらんやとひ山の事すやとひ山の事す

と銀色の山の事すやとひ山の事すやとひ山の事す

日暮能三首奇合す

ねの事すあらんやとひ山の事すやとひ山の事す

大膳大夫の鹿あらえ山雪

尼の山の事すやとひ山の事すやとひ山の事す

贈左大臣の雪ふえ

玉城御の山の事すやとひ山の事すやとひ山の事す

贈左大臣の雪ふえ

白毫御の山の事すやとひ山の事すやとひ山の事す

日暮能三首奇合す

ねの事すあらんやとひ山の事すやとひ山の事す

寺内院贈左大臣の首野

かの事すあらんやとひ山の事すやとひ山の事す

衣冠御の事すやとひ山の事すやとひ山の事す

贈左大臣の三首奇合

のくみくどひのうへ 高小金親也書い承て

流石

聚すまし高のうへ あくとすまへ とくと
金親也書い合小移書
ほそんむすもわすり やまとおもむき

河を書

凡う野やのとくに まうゆかく こはのと
國ア御家是がたうて あらへ けふ贈書
用せぬれあはれにそり えりやえ山とくとお書き

野や書

入道前大政奉公書
入道前大政奉公書

重護院卒とくとく書
重護院卒とくとく書

源大納言書
源大納言書

野と山とくとく書
野と山とくとく書

暖雪

あくとくのとくとく書
あくとくのとくとく書

御子方大納言書
御子方大納言書

用戸れ高下り明くゆるわが書
用戸れ高下り明くゆるわが書

雪護院卒とくとく松書

あくとくのとくとく書
あくとくのとくとく書

東山とくとく書
東山とくとく書

あくとくのとくとく書
あくとくのとくとく書

奇の雪はかしらの事

君にさくまくわくはるこひのうひのう

用物

むせりじゆくせんあせひりそくわく

國アカ浦多はまやくね雪

ほじよつてほりまことさくとおもへれ

浦雪

浦のれわ浦の日とて日暮れおひの浦の音あれば
浦のじいをせうれの音の浦の音うらうら音

陽あまく奇とけ用雪

陰とてくらとてげの清とてすずの風とすむらと

極共三首アリ浦雪

清とてくらとてげの音の音の音の音

湖雪

岸の浦の浦の浦の浦の浦の浦の浦の浦の浦の浦
わら浦やかとせくとせくとせくとせくとせくとせく

浦雪

あさのつらぬの道と浦の浦の浦の浦の浦の浦の浦
浦の浦の浦の浦の浦の浦の浦の浦の浦の浦の浦の浦

八道事政大吉あかくとせくとせくとせくとせく

浦あはかあすまわくとせくとせくとせくとせく

國ア浦多百首アリ

まどりとを浦多アリ野の浦多アリの浦多

不動寺寺多林雪

えのむすめやかめのむちもくとま

高井中少

通かばのねむはひからわの松

膳房食事そよぎ

あらゆる中へひづれとよいはし

けきやまと私かまわぬのあくね

東山やすんゆ比翼初花院入道大内家

那あわなむかわいさく

五

てのまのむかひせの高座きの高めやうぢ

は扇長家すみのゆ日暮秋の音

まつりの心の風音うまじゆうじゆ

二原人間家やくは山電

ほりぬみづかひくのをとせむ思ふる

春葉院二郎源雅と草そひ鶴香

幼年やうのよれにほひの語ひぬるをゆく

ひ子た大酒言處あまか月照雲

晴さればのとせがの主の月氣うきのまゆ

賄戸衣食あみ首か鷹羽

金事寺寺合

金はせとくらねのひまうきの歌ひのまゆ

前度廻る高かく夕雁羽

なまやとそのむだす高しげりやくまゆ

贈庄官歌三言と應る詩

うちのことをすてれどもさうぞうせんすわづ

入道前太政大臣歌三首ア)

ばそぞれとくの月の法事もゆきのやうめりと
民義守師まよかとあらわゆふ能手次
かほのよまじの度きりうつうすがの波

市子大綱歌をすすへ遠足電

院寺の煙草高きうちのりと書ひつぱりのま

月夜三首ア) 家電

えもしと見いこねりとく

山子大綱歌とくはくとあたは歌

歌あふせ

雪景早梅

うれぬに雪の香りあはなるよおとむけの神

市子大綱歌三十首ア) 早梅董川

ひめこねふくわざ歌をあくとまくとまの

風雪

下りみをよや年少はあともううらやとむ

八道前太政大臣歌三首風雪

かよひすかみて海雲のうよむかの年の

獨吟百首ア)

れもありあめつてのめりとすすもあらわと

市子大綱歌三十首ア) 独吟百首

はりてのれふをとあめくとめくとめくとめく

歌尊

時もあればひよそに此意をかねて書くと
は序洋井月次うすい家風書
山城子のうるひよそかの筆かわせといふ

墨書き

あらまなむわねの波うのうきよほけまとのしき
壺うなのめみこゑやのうてよのうくわくわ年の波
浦のた大御雲ふとくわくあくわく
はてのうこううこえんせのれくまく書く年のはらゆ

亦太政大臣四三首アリ

あまたうめくの月見夜すよしうりわらわ
應長比よんねりて百首アリ

波音山春うり多くかかなへあそぶ年はる

聖遺院卒年アリ

わじの人のたまほんことかづくとがの年の波

聖遺院賜左右官家四首墨書き

ちやんちあひ年うるひ波のうくわく書く

聖遺院入道詔玉家三首墨書き

わの波うこ年うるひ波うくわく書く年はる

承

應永七年春はい預阿も筆下西原
書寫之候勘畢

東原の致

三ツを附し

私に目につくよりどうりやうのやの、ハドのよきみ

初物也

うきよハ一葉もすすむおのすひとやせりて勝

上原

に船
ノリハヤシヒトけたるはの船の車のよし
リよみ、嘗てのけづりすまほうわくわく

まほのそら拂とケル、南からか數えども

